

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## <書評> 酒井健氏の『シュルレアリスム』を読む

著者	武田 昭彦
出版者	法政哲学会
雑誌名	法政哲学
巻	8
ページ	57-60
発行年	2012-06
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/7428">http://hdl.handle.net/10114/7428</a>

## 【書評】

酒井健 『シュルレアリスム』 中公新書、中央公論新社、二〇一一年

## 酒井健氏の『シュルレアリスム』を読む

武 田 昭 彦

本書は一月二五日に刊行されたようだが、その翌月から国立新美術館では「シュルレアリスム展——パリ、ポンピドゥーセンター所蔵作品による」(二月九日～五月九日)が始まったので、私はシュルレアリスム愛好家として、確認作業のようにこの展覧会を見に行ったことをいまいだしている。そして、その一ヶ月後、あの「3・11」があつて、私は自宅のある仙台で被災した。しばらくはむろん本などは読めなかった。人々は夢遊病者のように歩きまわり、水や食料を求めていた。知人の住む気仙沼はまるで戦場のようでありさまで、方々の海岸で多くの死体が上がったという。しばらくすると、よそから人々がやって来て、そのうち「いまアートになにができるのか」なんていう馬鹿げた催し物もあり、復興、復興と掛け声だけが喧しかった。死

にかけていた国分町のネオン街にはフッコウの灯がとまり、仙台だけは一見景気がいいようにみえるが、われわれ一般の家屋の補修はなかなか進まなかった。やっと修理を終えた我が家のアパートに越してきた相馬の青年は母を亡くした。故郷を捨てた無念の面影が哀しい。人々に放心はもはやないが、やるせない怒りが残るばかりだ。

酒井氏の本の書評なのに、なぜこんな震災の話をもち出すかというと、まさに本書の第I章「大戦争のなかで」の始まりが、「怒り」と「放心」だからである。氏は、まずバタイユの証言、その『文学と悪』にある「擾乱」という言葉から始めている。この擾乱とは、第一次世界大戦に駆り出された若者たち、バタイユはもちろん、ブルトンやア

ラゴンやマッソンのような生還した復員兵のなかに渦巻いていた怒りの感情であり、これが戦中のダダイズムを通じて、それまでの社会・文化的な価値に対する否定の反抗行為となり、戦後のシュルレアリスム運動へ展開していく原動力となったという。そして酒井氏は「放心」をとりあげる。ブルトンが『シュルレアリスム宣言』でこの「放心」については述べてはいたものの、正直言って、本書を読むまで私は、気にはなっていたけれど、深くは考えていなかった。しかし、ブルトンやマッソンの戦場での極限状況での放心、死との隣り合わせの恍惚感、戦慄、そして砲弾のさなかの静寂感、これらがまさに「超現実」の原点であったとする本書の記述に目を開かれ、放心という空虚感、これによって、人はある充実感を体験するのであるということに納得が行ったのである。一般にシュルレアリスムの美の理論は、「驚異なるもの」や「煙攣的なもの」とされ、それがエロティシズムと結びつけられるのだが、それは、死を賭さない限り、言葉だけでは、あるいは性愛だけではなんの意味もない。まさに酒井氏が述べているように、「死ぬかと思うほどの激しい戦慄」に襲われなければ、「生者と死者とのあいだの生き生きした曖昧さ」は体験できないのである。

このように本書の第Ⅰ章は、それまでの美術史的な解説

のシュルレアリスム本にはみられない、この運動の根本に迫る解釈がなされている。シュルレアリスムの頭目であるブルトンの評判がよいのは、スキャンダラスな事件から見るからで、まずは彼の本を真剣に読まなくてはならない。この点で、酒井氏は資料を丹念にあたっているのだ、それ以降の各章を読み進めるうちに、自分もブルトンやアラゴンなどのテクストを読んでみよう、あるいは読み直してみようという気になるのである。そして、氏はこの章の終りで、シュルレアリスムとは、フランスにおいて初めて正面から近代を切り裂いた思潮なのであるとし、ブルトンは、一九六三年『ナジャ』の全面改定版に付した序文で自分の仕事を「まちがいだらけの恋文」と形容しているが、過誤を冒しつつも近代の彼方へ恋をしたこと、そこへ出て行こうと模索したことがまずもって評価されるべきだ、と述べている。まさに同感である。

第Ⅱ章は「シュルレアリスムの誕生」と題されているとおり、ブルトンがシュルレアリスムの創作行為である自動記述に至るまでの軌跡と、超現実と偶然性の問題が検討されている。一般にシュルレアリスムの自動記述にまつわる素朴な疑問、すなわち、その定義通りに本当に理性の介入なしに書かれたのかどうか、その信憑性にあった。しかし、

ブルトンの死後、その草稿には推敲や組み替えの跡があり、自動記述が無意識的思考の「書き取り」で終わるものではないことが明らかになったのである。だが、このことは、ダダのコラーージュ詩が示すように、その素材（言葉）は「帽子の中から」偶然に取りだされるにしても、最低限のフランス語の文法は守られているのであって、支離滅裂な組み合わせでは理解されないし、詩にもならないのは自明の理である。自動記述も同様で、ブルトン曰く、意識の底から生まれる錯乱や幻覚に陥らないための基礎的な精神衛生を考慮して、ある程度理性的に加工された思考の記述を対象として行われ、フランス人に理解できる構文で表わされた思考の記述なのである、というわけである。

ところで酒井氏は、ここからもっと本質的な問題、すなわち、二つの事柄の「あいだ」で偶然に生起するイメージの問題をとり上げる。これは、ロートレアモンの一句——手術台の上のミシンと雨傘の偶然的な出会い——を一般化した言葉「デペイズマン」と呼ばれるものであるが、氏はロートレアモンを持ちださず、ルヴェルディの方法、すなわち、比喩をやめ、二つの現実の引き寄せから第三項を創出するというイメージ論にブルトンは注目したとする。しかし彼は、この「引き寄せ」ではなく、偶然に現れた二つの現実が予期せぬ仕方で近寄り、新たなイメージを生み

出すことが第三の現実であり、それが超現実のイメージだと考えるようになったという。さらに、超現実のイメージは、「一つの伝導体間の電位差」が発する閃光に彩られ、これがブルトンにとって「不可思議」という美しさであるのだが、「しかし美しさを超える不可思議（驚異なもの）もあるはずだ」と酒井氏は述べている。無論そうであるが、私がここでちょっと考えたのは、「一つの伝導体間の電位差」ではあまり閃光を発しないのではないかということだ。だから、シュルレアリスムの偶然が客観的に見れば必然であって、それが主観にとって異質なものの、遠いものの出会いだから、偶然と感じられ、普段われわれにとって不合理な関係にあるものが、われわれの内ですら突然接近し、スパークするというのも分からないわけではないが、シュルレアリスムのあの「瘡癩的美」を考えると、突然の閃光ではなく、なにかもっと秘めた持続的な微かな放電現象を想像するのである。

第三章は「近代都市のなかで」と題され、ここでは、シュルレアリストたちの、近代文明のただ中で近代が失ったものの発見が述べられている。私が注目したいのは、アラゴンの『パリの農夫』に関する部分である。むろんこの本はベンヤミンの『パサージュ論』に影響を与えたものとして

知られるが、その主題は第一部の題名ともなっている「現代の神話」である。それは、酒井氏によれば、古代の神話あるいはキリスト教信仰のように、さまざまな神あるいは一柱の神が人間界の彼方で超然と、そして永遠に、存在するのではなく、何か名状しがたい神的なものが、人間界のなかに現われては消えて行くことなのである。人間の体験のなかに現われ、その体験が終わると、やがて跡形もなく消滅していくことなのである。これが、まさに「超現実」であり、この超現実をめぐる詩なり説話が「現代の神話」にはかならないという。そして、この神的なもの、ただ感覚だけで捉えられるから、近代人の理性からすれば、たんなる錯覚、まぼろしにすぎない。だが、酒井氏によれば、アラゴンは、近代人から誤謬と非難されようと、触覚や視覚の反応に忠実であり、逆に理性をこの反応に従わせて狂った花を咲かせようとしたとし、さらに氏は、この超現実の神々しい幻影が新たな理想であり、それはまた「つかの間のもの *l'éphémère*」であった、と言っている。私は、この部分を読んだとき、ちょうど「ジャコメッティにおける永遠とはかなさ」ということを考えていたので、非常に共鳴し、早速アラゴンの『パリの農夫』をフランス語で読んでみようという気になったのである。

最後の第IV章は「政治と芸術」であるが、これは第I章と呼応している。つまり、近代合理主義批判と脱近代であり、一九二四年発行のシュルレアリスムの機関紙『シュルレアリスム革命』誌やその後の『革命のためのシュルレアリスム』誌が示しているように、それは、精神の自由を目指した、個人のそして世界の「革命」なのである。だが、酒井氏は、最初にベンヤミンのシュルレアリスム論を引き、シュルレアリスムたちの「自由の経験」が構成的で独裁的な「革命の経験」に結び付くのかどうか、疑問を呈している。ここから氏の分析は詳細で読み応えがあるのだが、紙数が限界なので、本書を開いてもらうしかない。

酒井氏は、シュルレアリスムの専門家ではなく、バタイユの研究者である。この視点からのシュルレアリスム論を待望していた人は多いに違いない。とにかく貴重な一冊である。